＜原著＞

大学生の乳児への好意感情および親との愛着と育児観の関連性

新谷里菜　　信州大学大学院総合人文社会科学研究科
水口　崇　　信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では，親への愛着と乳児への好意感情の程度，それらが育児観に与える影響を検討した。調査対象は大学生の 142 名（男性 49 名，女性 93 名）である。初めに，親への愛着と育児観と検討した結果，愛着不安の高さが「育児不安」に正，「育児肯定感」に負の影響を与えていた。これは児童期の家族関係が育児意識に影響を与えるという先行研究を支持していた。親への愛着と乳児への好意感情は，「愛着不安」「愛着回避」ともに影響がなかった。両親との関係が良好であるほど，子どもへの好意感情が高くなるという研究知見と異なっていた。乳児への好意感情と育児観は，「育児不安」に対し負，「育児肯定感」「子ども至上感」に対し正の影響を与えていた。最後に育児意識と乳児への好意感情は，育児意識にも乳児への好意感情にも性差がなかった。これは子育ての期待と肯定感，子育てへの不安が男性よりも女性の得点が高いという従来の見解に反する結果であった。

キーワード：大学生，親への愛着，乳幼児への好意感情，育児観

問題と目的

母親と父親との関係が，子どもの発達に大きな影響を与えていることはよく知られている。子どもにとって，生まれてから最初に関わりを持つ他者は父親や母親である。父母との言語的，情緒的なかかわりを通して心身を健全に発達させていく。発達していく中で，他者との特別なつながりである愛着（attachment）も構築される。Bowlby, J.は愛着を「ある個体がほかの特定の個体に対して，接近を維持しようとするような愛情の絆」と定義している（Bowlby，1976）。

愛着は，のちに内的作業モデル（inner working model）になり，対人関係パターンにも影響を与えるようになる。内面化された内的作業モデルは，乳児期からの父母等重要な他者との関係は，青年期，成人期の対人関係にも影響を与える。それに対して，母親や父親も育児を行い，子どもとかかわる中で，精神面・行動面ともに発達していくことが明らかになっている。例えば，幼児期の子どもを育てる父親・母親に対する調査では，親となる

ことで「柔軟さ」「自己抑制」「運命・進行・伝統の受容」「視野の広がり」「生きがい・存在感」「自己の強さ」が変化していくことが示されている（柏木・若松，1994）。また，母親に対する調査では，母親は子育てを通して，「母親としての自分」と「自己としての自分」の２側面を発達させることも明らかとなっている。つまり，母親としての発達は，子育てを通して築く他者（子ども，夫）との関係性の中で自己を変容させていくことであるとされている（井上，2003）。それに対して，父親は子育てを通して，「家族への愛情」「責任感や冷静さ」「子どもを通しての視野の広がり」「過去と未来への展望」の４つが発達するとされている（森下，2006）

このように，育児を行うことで，親自身も成長発達できるというポジティブな面が明らかになっている。その一方で近年，我が国の少子化は社会問題として極めて深刻になっている。厚生労働省の 2020 年の調査によると，出生数は 84 万 832 人となっている。これは，前年の 2019 年よりも 2 万 4,407 人少なく，1899 年の調査開始以来過去最少となっている。また，合計特殊出生率も前年比の 0.02 ポイント減の 1.34 となっており，自然増減数は過去最大の減少となっている。そのような中で，対策を推し進めることが喫緊の問題となっている。少子化の原因の一つとして，若者の未婚化，晩婚化があるとされている。2020 年の調査によると，平均結婚年齢は男性で 31.0 歳，女性で 29.4 歳となっている。25 年前の調査では，男性が 28.5 歳，女性が 26，3 歳となっているので，結婚年齢が上がっていることが見て取れる。また，第１子出産時の母親の平均年齢も上昇しており，2019 年には，30.7 歳となっている。

それに対して，現在青年期にある人々の意識調査が実施されている。2010 年に明治安田生命が全国の大学生 4,120 名を対象にして行った調査によると，将来結婚したいと思っている人（「結婚したい」「できれば結婚したい」と回答した人）の割合は男性で 73.5%，女性で，78.3%であった。また，子どもを持つことへの考え方としては，「子どもが欲しい」と回答した人の割合は男性で 46.0%，女性で 49.8%であった。つまり，大学生の約 7 割は結婚をしたいと考えており，約 5 割は子どもが欲しいと考えているといえる。近年では，育児を取り巻く情勢も変化してきており，男性の育児休暇が取得しやすくなり，実際に取得している人の割合も増加傾向にある。また，育児をしながら働きたいと考えている女性も増えてきており，そのような女性を支援する制度なども充実しつつある。そのような事実も踏まえると，青年期において育児観や子どもを持つことへの意識も変化しつつあることが推測される。

先行研究の中で，大学生がどのような育児観を持っているかについて明らかにしているものは多い。しかしながら，男性のみ・女性のみの研究が多く，男女ともに調査を行い，性差について検討しているものは希少である。また，育児観がどのような要素の影響を受けているかについて検討しているものも少ない。そこで今回の研究では，１）学生が持つ育児観はどのような要素に影響をうけているか，２）学生の育児観における性差の２つを

中心に検討を行っていく。

育児観に影響を与えると考えられる要因

乳児への好意感情　育児観に影響を与えると考えられる要因の一つに「乳児への好意感情」が挙げられる。先行研究では，猪木（2010）が育児肯定得点は対児接近得点から，育児否定得点かは対児回避得点から大きな影響を受けていることを明らかにしている。また，乳児を持つ母親を対象にした研究によると，子どもへの否定的な感情は育児ストレスに影響を与えている（高橋，2007）。このように，子どもに対する感情は，育児に対する様々な意識に対する影響が注目されている。よって本研究においても育児観との関連を分析する。

両親との関係性　育児観に影響を与えると推測される２つ目の要因として両親との関係性があげられる。それは育児を行う際に，一番手本になる身近な人は自身やパートナーの両親や祖父母となるからである。実際，人口問題研究所の 2013 年の調査によると，妻が出産や子育てで困ったときの相談相手として，最も多い比率を占めていたのは，自身の親であった。そのため，両親との関係性は自身の育児観に大きな影響を与えると考えられる。先行研究によると，男女ともに，幼少期のアンビバレントな愛着パターン得点が高いと，結婚観や子育て観にネガティブな影響を与えることが明らかになっている。一方で，女性では拒否的な愛着パターンの得点が高いと，子育てへの期待が高まることも指摘されており，幼少期の母子関係よりも，現在の人間関係においての適応が結婚観や子育て観に影響を与えるとされている。また，女性に対する研究で，子ども時代の母親・父親に対する印象が悪く，現在も両親との仲が良くない人は親になったという実感を抱きにくいことも示唆されている（小林・渡辺，2000）。これに対して，男性に対する研究では，幼い時に父親に関わってもらったという思いが強いほど，子育てへの充実感が高いとされている（森下，2006）。以上を考え合わせると，幼いころから現在に至るまでの両親との関係性は育児に対する意識に影響を与えると予想される。

方法

調査対象者

甲信越地方にある国公立大学の学生のうち，教育系の講義を受講する学生 149 名を対象にした。年齢は 19～24 歳で，平均年齢は 20 歳であった。有効回答数は回答に不備があったものを除いた 142 名（男性 49 名，女性 93 名）であった。

調査内容

フェイスシート項目と，３つの尺度を用いた質問紙を使用した。尺度項目は１．全くあてはまらない，２．あまりあてはまらない，３．どちらともいえない，４．ややあてはまる，５．非常にあてはまるから１つに〇をつけてもらう５件法で回答を求めた。

フェイスシート項目　性別と年齢を尋ねた。性別は男女どちらかを選択してもらい，年齢は回答者に自由記述で回答を求めた。

育児意識に関する尺度　坂本・古橋（2006）が作成したもので，育児に関する意識がどのようなものかについて回答を求める。「子育て不安」「育児疲労・不満」「育児への肯定感」「社会的な不安」「子ども至上感」の５つの因子からなる。全 42 項目を使用した。

乳幼児への好意感尺度　青年期男女双方に使用が可能である「親性準備性尺度」のうち，「乳幼児への好意感情尺度」を用いた。９項目を使用した。

親への愛着感情尺度　丹羽（2005）が作成した親への愛着尺度を使用した。「愛着不安」と「愛着回避」の２因子からなる。全 17 項目を使用した。

手続き

2021 年 10 月に無記名・個別記入式の質問紙調査を実施した。配付は授業の後半に質問紙の説明とともに行い，授業終了後に退出する際に提出してもらった。提出をもって参加の同意とした。

倫理的配慮

倫理的配慮のために以下の説明を配布時に実施した。１）回答を避けたくなった場合には，回答を控えても構わないこと，２）回答をやめたくなったり，回答に参加したくなかったりする場合には強制はせず，中断しても構わないこと。また，回答をしなかった場合にも実施した授業の成績に不利益にはならないことである。

結果

乳児への好意感情の性差の検討

乳児への好意感情における男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表１に示す。

表１　乳児への好意感情性差

	男	女
データ数	49	93
平均値	3.89	3.99
標準偏差	0.79	0.8

乳児への好意感情について，女性の方がやや高い。性差を検討するために t 検定を行った。検定の結果は有意ではなかった（両側検定：t（140）＝-0.715, p=.476, d=-0.216）。したがって，乳児への好意感情について性差はなかった。

育児意識における性差の検討

育児意識については，「子育て不安」「育児疲労・不満」「育児への肯定感」「社会的な不安」「子ども至上感」のそれぞれの因子について性差の検討を行った。

「子育て不安」における性差　育児意識の中の「子育て不安」について男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表２に示す。

表２　子育て不安性差

	男	女
データ数	49	93
平均値	2.99	3.09
標準偏差	0.57	0.7

「子育て不安」について，女性の方がやや高かったが有意ではなかった（両側検定：t(140) = -0.83, p = .41, d = -0.14）。したがって「子育て不安」も性差はなかった。

（２）「育児疲労と不満」における性差　育児意識の中の「育児疲労と不満」について男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差を以下の表３に示す。

表３　育児疲労と不満性差

	男	女
データ数	49	93
平均値	3.36	3.4
標準偏差	0.65	0.67

「育児疲労と不満」の平均値について女性の方が高かった。この差の有意性を検討するために t 検定を行った。その結果有意ではなかった（両側検定：t（140）＝-0.40, p = .690, d = -0.07）。したがって，「育児疲労と不満」についても性差はみられなかった。

育児肯定感における性差の検討　育児意識の中の「育児肯定感」について男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差について以下の表４に示す。

表４　育児肯定感性差

	男	女
データ数	49	92
平均値	3.34	3.77
標準偏差	0.6	0.74

「育児肯定感」の平均値について女性の方がやや高い値であった。この差が有意であるかを検討するために t 検定を行った。結果有意ではなかった（両側検定：t（139）＝0.541, p = .589, d = 0.095）。したがって「育児肯定感」にも性差はなかった。

「子ども至上感」における性差の検討　育児意識の中の「子ども至上感」について男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差について以下の表５に示す。

表５　子ども至上感性差

	男	女
データ数	49	93
平均値	2.2	2.13
標準偏差	0.68	0.61

「子ども至上感」の平均値については男性の方がやや高かった。t 検定の結果有意ではなかった（両側検定 t（140）＝0.61, p＝.543, d＝0.107）。よって「子ども至上感」にも性差が見られなかった。

「社会的な不安」における性差の検討　育児意識の中の「社会的な不安」について男女それぞれのデータ数，平均値，標準偏差について以下の表６に示す。

表６　社会的な不安性差

	男	女
データ数	49	93
平均値	3.45	3.46
標準偏差	0.74	0.8

t 検定の結果「社会的な不安」の平均値についても，ほぼ男女差がみられなかった（両側検定：t（140）＝-0.021, p＝.983, d＝-0.004）。

親への愛着が乳児への好意感情に与える影響

親への愛着感情の中で「愛着不安」と「愛着回避」のそれぞれが乳児への好意感情に与える影響を検討するためにそれぞれに対して単回帰分析を行った。

「愛着不安」が乳児への好意感情に与える影響　分析の結果，決定係数が有意ではなく，影響は見られなかった（R^2＝.017, F（1, 140）＝2.49, p＝.117；表 7）。

表７　愛着不安が乳児への好意感情に与える影響

	乳児への好意感情	95%下限	95%上限
愛着不安	-.132	-0.298	0.034
決定係数	.017		

「愛着回避」が乳児への好意感情に与える影響　同様に，結果は有意ではなく，影響は見られなかった（R^2＝.005, F（1, 140）＝0.638, p＝.426；表 8）。

表８　愛着回避が乳児への好意感情に与える影響

	乳児への好意感情	95%下限	95%上限
愛着回避	.067	-0.099	0.234
決定係数	.005		

乳児への好意感情が育児意識に対して与える影響

乳児への好意感情が育児意識の「育児不安」,「育児疲労と不満」,「育児肯定感」,「子ども至上感」,「社会的な不安」のそれぞれに与える影響を検討するため単回帰分析を行った。

乳児への好意感情が「育児不安」に与える影響　分析の結果，決定係数は有意であり，負の影響が見られた（$R^2 = .081$, F（1, 140）$= 12.37$, $p = .001$）。偏回帰係数は表 9 に示した通り-.285 で有意であった。

表９　乳児への好意感情が育児不安に与える影響

	育児不安	95%下限	95%上限
乳児への好意感情	-.285 **	-0.445	-0.125
決定係数	.081 **		

乳児への好意感情が「育児疲労と不満」に与える影響　同じく，決定係数は有意ではなかった（$R^2 = .021$, F（1, 140）$= 3.039$, $p = .083$；表 10）。

表 10　乳児への好意感情が育児疲労と不満に与える影響

	育児疲労と不満	95%下限	95%上限
乳児への好意感情	-.146 +	-0.311	0.020
決定係数	.021 +		

乳児への好意感情が「育児肯定感」に与える影響　決定係数が有意であった（$R^2 = .217$, F（1, 140）$= 38.47$, $p < .01$）。また，偏回帰係数に正の影響がみられた。結果は以下の表 11 に示す。

表 11　乳児への好意感情が育児肯定感に与える影響

	育児肯定感	95%下限	95%上限
乳児への好意感情	.466 **	0.317	0.614
決定係数	.217 **		

乳児への好意感情が「子ども至上感」に与える影響　分析の結果は有意であった（R^2

= .117, F（1, 140）= 18.48, p < .01）。また正の影響もみられた。偏回帰係数は以下の表 12 に示した通りである。

表 12　乳児への好意感情が子ども至上感に与える影響

	子ども至上感	95%下限	95%上限
乳児への好意感情	.341 **	0.184	0.498
決定係数	.117 **		

乳児への好意感情が「社会的な不安」に与える影響　分析を行ったところ，結果は有意ではなかった（R^2 = .001, F（1, 140）= 0.091, p = .763；表 13）。

表 13　乳児への好意感情が社会的な不安に与える影響

	社会的な不安	95%下限	95%上限
乳児への好意感情	.025	-0.142	0.193
決定係数	.001		

親への愛着が育児意識に与える影響

親への愛着の「愛着不安」と「愛着回避」が育児意識に与える影響を検討するため，「愛着不安」と「愛着回避」を独立変数，育児意識のそれぞれを従属変数とした重回帰分析を行った。

親への愛着が「育児不安」に与える影響　分析を行ったところ，決定係数は有意であった（R^2 = .148, F（2, 141）= 12.099, p < .01）。標準偏回帰係数が有意であった変数は「愛着不安」であった（表 14）。

表 14　親への愛着が育児不安に与える影響

	育児不安	95%下限	95%上限
愛着不安	.362 **	0.175	0.549
愛着回避	.039	-0.149	0.226
決定係数	.148 **		

親への愛着が「育児疲労と不満」に与える影響　検定の結果，有意ではなかった（R^2 = .030, F（2, 141）= 2.126, p = .123；表 15）。

表 15　親への愛着が育児疲労と不満に与える影響

	育児疲労と不満	95%下限	95%上限
愛着不安	.176 +	-0.024	0.376
愛着回避	-.007	-0.207	0.193
決定係数	.030		

親への愛着が「育児肯定感」に与える影響　決定係数は有意であった（R^2 = .090, F（2, 140）= 6.819, p = .001）。標準偏回帰係数が有意であった変数は愛着不安であった。結果は以下の表 16 の通りである。

表 16　親への愛着が育児肯定感に与える影響

	育児肯定感	95%下限	95%上限
愛着不安	-.316 **	-0.510	-0.122
愛着回避	.031	-0.163	0.225
決定係数	.090 **		

親への愛着が「子ども至上感」に与える影響　決定係数は有意ではなかった（R^2 = .039, F（2, 141）= 2.840, p = .062；表 17）。

表 17　親への愛着が子ども至上感に与える影響

	子ども至上感	95%下限	95%上限
愛着不安	.144	-0.055	0.343
愛着回避	-.240 *	-0.439	-0.041
決定係数	.039 +		

親への愛着が「社会的な不安」に与える影響　同じく，決定係数は有意ではなかった（R^2 = .036, F（2, 141）= 2.599, p = .078；表 18）。

表 18　親への愛着が社会的な不安に与える影響

	社会的な不安	95%下限	95%上限
愛着不安	.103	-0.096	0.302
愛着回避	.112	-0.088	0.311
決定係数	.036 +		

考察

親への愛着が育児観に与える影響について

愛着以外で育児意識に影響を与えるものとして，児童期の家族の思い出が挙げられる。上（2019）によると，児童期の家族の思い出は，現在の家族関係を通して，育児への積極性につながっている。児童期に温かい家庭を経験すると，育児に対して前向きになれる一方で，家庭で苦い経験をしても，それを乗り越える中で自主性を獲得し，周囲に尊重してもらえれば自分に自信がつき，育児に対する不安も軽減される。また，男性に対する研究では，幼いころに父親に関わってもらったという思いが強いと子育て充実感が高いとも示唆されている。溝端・武藤・桂田（2010）によると，父親を自己のモデルとして肯定する気持ちや，きちんとしつけや教育を受けたという経験が子育て意識を高めるうえで重要だと考えられている。

また，育児意識とは少し異なるが，扇原・上村（2018）は，乳幼児への接触経験や他者意識が子どもへの関心を高めることを示している。本研究の結果から，親への愛着の中でも愛着不安の高さが育児意識の中の「育児不安」に正の影響を与え，「育児肯定感」に負の影響を与えることが明らかとなった。これは，親への愛着が育児意識に対して何らかの影響を与えるという仮説の一部を支持する結果となった。「育児不安」因子にある項目として，「自分ひとりで育児をしなければならないような圧迫感がある」，「子育ての全般がわからない」，「育児の相談をする人がいるかどうか不安に思う」といったものがある。このような項目の影響かも知れない。

親への愛着の中の「愛着不安」にあたる項目としては，「私が親に頼ることを，親は迷惑に思っているのではないかと心配になる」「親は困った時に私を助けてくれるか不安に思う」といったものがある。育児を行う際に，自分の配偶者以外で頼ることができるのは自分や配偶者の親であることが考えられる。また，親をお手本に育児を行いたいと考えることも多いだろう。今現在の「困ったときに親に頼ることができない」「頼ってもいいのかわからない」という感情が「子どもを産んでも親には頼れない」といった育児観につながり，育児不安が大きくなることが考えられる。また，「育児肯定感」に当たる項目としては，「子育ては楽しいと思う」「育児はいとおしい」等といった，子どもや育児に対する好意的な感情を表している。親との愛着に不安を抱えている人にとって，親に迷惑をかけていると思っていたり，自分と近くにいることを望んでいないのではないかと思ったりしていると考えられる。そのような感情を通して親を見て育児観を築いていく中で，自身の育児に対しても肯定感を持つことができなくなってしまうのかも知れない。

愛着回避の影響がみられなかったことについて，愛着回避の傾向にある人は，他者と一定の距離を保って付き合っていくことを好む傾向がある。そのため，育児の中でも「自分だけで何とかしなければならない」といった意識があまり生起せず，育児観に対して影響がみられなかったことが考えられる。また，愛着回避の平均得点自体も低く，あまり差が

生まれなかったことも要因として考えられるだろう。次に，ほかの育児観の因子についても親への愛着の影響がみられなかったことについて，「育児不安」と「育児肯定感」以外の因子の特徴が要因として考えられる。ほかの育児観の因子は育児が疲れるものであるととらえているか，子どもが一番大切であるかどうか，また，育児に社会的な不安があるかどうかを尋ねるものであった。それらの意識を左右する要因としては親との関係の如何よりも社会情勢や自身の子どもへの意識があると考えられる。そのため，「育児不安」と「育児肯定感」に対しては，親への愛着の影響がみられなかったと考えられる。

親への愛着が乳児への好意感に与える影響について

親への愛着は，「愛着不安」，「愛着回避」のどちらとも乳児への好意感に影響を与えていないことが明らかとなった。小林（2014）によると，両親との関係が良好であるほど，子どもをかわいいと感じる，つまり，子どもを好意的にとらえるとされてきたが，今回の結果は，この先行研究を支持しない結果となった。

愛着には世代間伝達あることが従来，指摘されている（遠藤，1992）。そのため，親への愛着は乳児への好意感に何らかの影響があると考えられる。しかしながら，今回そのような結果とならなかった。その理由として以下のことが推測される。第一に，愛着を不安定にするような強烈なエピソードがなければ，乳児への好意感情に影響が出ないことである。今回の研究では，親との関係が揺らいだエピソードや，大まかに関係性が良いか悪いかを尋ねることはなかった。それらの要素も含めたうえで分析を行うことで，何らかの影響が出ると予想される。第二に，乳児への好意感情にあまり差が出なかったことである。乳児への好意感情の平均得点は４と高く，また，分散も小さかった。そのため，分析を行う上で影響を抽出することができなかったと考えられる。最後に，乳児と回答者の関係を仮定しなかったことである。愛着の世代間伝達は自分の肉親と自分，自分と自分の子どもの愛着が想定されている。ここでは乳児を特定することがなかったため，回答者が想定した乳児はそれぞれ異なっていたと考えられる。そのため，想定されるような影響が出なかったのかも知れない。

乳児への好意感情が育児観に与える影響

乳児への好意感情が育児意識に与える影響についての検討を行ったところ，以下のような結果が得られた。乳児への好意感情は「育児不安」に対して負の影響を与えていた。「育児肯定感」「子ども至上感」に対して正の影響を与えていた。猪木（2010）によると，対児接近感情は育児肯定感情と正の相関関係にあり，育児否定感情と負の相関関係にある。それに対して，対児回避感情は育児肯定感情と負の相関関係にあり，育児否定感情と正の相関関係にある。今回の分析結果は先行研究とほぼ同じ結果になったと言えよう。「育児疲労と不満」「社会的な不安」に対して影響がみられなかったことに対しては以下のことが考えられる。「育児疲労と不満」に関しては，育児が疲れるものであるかどうか，イライラしそうか等を問うものであった。それらは子どもが好きかどうかよりも，自身の特性やパート

ナーとどのように育児を行いたいかに関わってくると考えられる。また，「社会的な不安」に関しても，子どもへの好意ではなくその時の社会情勢等に左右されるものであると考えられる。これらの要因により，乳児への好意感情は「育児疲労と不満」「社会的な不安」に影響がみられなかったのではないだろうか。

育児意識，および乳児への好意感情の性差

育児意識，および乳児への好意感情を検討したところ，育児意識のどの因子についても，乳児への好意感情についても性差がみられなかった。井梅（2019）によると，子育てへの期待・肯定感，子育てへの不安感ともに男性よりも女性の得点が高いとされている。今回の結果はその研究結果に反するものとなった。先行研究と異なる結果になった理由として，以下のことが考えられる。今回の研究で分析の対象となったのは，教育学部に所属する学生がほとんどであった。そのため，男性も女性も子どもが好きな人が多いことが考えられる。そのため，乳児への好意感情に差が出ず，そこから育児観にも差が見られなくなった可能性である。それらの理由により，育児意識や乳児への好意感情に性差が現れなかったと考えられる。

今後の課題

今回の研究の問題として，以下の点が挙げられる。まず，調査対象者の属性に偏りがった点である。今回の調査対象者は，教育学部の学生がほとんどであった。そのため，もともとの特性として，子どもに対して好意的に思っている人が多いと考えられる。また，調査を実施した講義のうち１つが，子ども観に関するものであったことも関係すると考えられる。その授業の内容も調査への回答に影響を与えたと考えられる。今後，同じ調査をほかの学部の学生や様々な講義に参加する学生を対象とすることで今回よりも詳細な結果が得られると考えられる。次に，質問項目についてである。今回は育児観についてしか問わなかったが，どこで家庭を持った時にどのようなところを生活拠点としたいと考えているか，子どもができた後も仕事を続けたいと考えているか，といったことは尋ねなかった。育児観を築くにはそれらの要素もかかわってくると考えられる。最後に，今回は「親」との愛着を尋ねるというように，母親・父親に絞らずに調査を行った。先行研究によると，母親との関係，父親との関係で育児観や子どもに対する意識も異なるとされている。調査対象者や質問項目をより精査して調査を行うことを今後の課題としたい。

文献

遠藤利彦(1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達　東京大学教育学部紀要, *32*, 203-220.

井梅由美子(2019). 大学生の結婚観，および子育て観について－自身の被養育体験，父母との関係性，対象関係に着目して－　東京未来大学研究紀要, *13*, 11-21.

井上芳世子(2003). 母親としての発達に関する研究の展望－葛藤場面に注目して－ 広島

大学大学院教育学研究科紀要, *52*, 227-230.
猪木省三(2010). 大学生の育児観及び対児感情に関する研究　県立広島大学人間文化学部紀要, *5*, 37-43
厚生労働省(2021). 「令和 2 年(2020 年)人口動態統計月報年計の概況」結果概要, 2021 年 12 月 12 日に以下のサイトより閲覧
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/index.html
柏木恵子・若松素子(1994). 「親となること」による人格発達 : 生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究, *5*, 72-83
小林　真・渡辺亜矢 (2000). 母親であることについての女性の自己意識－自己受容感と自己拒否感に関する調査－　富山大学教育学部研究論集, *3*, 63-67
小林　真(2014). 認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか. 富山大学人間発達科学部紀要, *8*, 43-48.
明治安田生命(2010). 大学生のライフスタイルと将来観, 2021 年 12 月 12 日に以下のサイトより閲覧
https://www.myri.co.jp/publication/myilw/pdf/myilw_no76_feature_4.pdf
溝端奈穂・武藤麻美・桂田恵美子(2010). 男子大学生の子育て意識を規定する要因　臨床心理学研究, *36*, 15-19.
森下葉子(2006). 父親になることによる発達とそれにかかわる要因　発達心理学研究, *17*, 182-192
丹羽智美(2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程　パーソナリティ研究, *13*, 156-169
扇原貴志・上村佳世子(2018). 大学生における子どもへの関心の諸要因―乳幼児との接触経験・内的作業モデル・他者意識の影響―　応用心理学研究, *43*, 256-266
坂本康子・古橋啓介(2006). 女子大生における理想の生き方と育児観について　福岡県立大学人間社会学紀要, *15*, 119-137
高橋有里(2007). 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因　岩手県立大学看護学部紀要, *9*,31-41
上　恵実(2019). 児童期における家族の思い出が大学生の育児観に与える影響　日本心理学会第 83 回大会発表論文集, 343.